
機動戦士ガンダムSEED DESTINY 『Universe of Aweke』

桃月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 『Univers
e of Awake』

【Nコード】

N7423B

【作者名】

桃月

【あらすじ】

C・E・73、人はまた歴史の中の戦争を・・・あの悲劇を繰り返そうとしていた。そんな中、オーブで内密に造られた新型MS“アウエイク”とそのパイロットとして選ばれる事となる少女はどんな運命を迎えるのか！？

覚醒の鼓動（１）

―星がいつも光って見えるのは何故か、わかるか？―

「・・・昔、あなたがよく私に言ってくれた言葉だよね」

工場の屋根裏で夜空を見上げていた一人の少女がそう呟く。
記憶に浸っていたのか。

その目は酷く切ないものだ。

ここはオーブと呼ばれる一国家。

頑なに平和への理念を貫き通していた国でもあった。

過去形なのは先日地球連合軍と同盟を結んだからだ。

今、世界では再びプラント、連合と二手に戦力が別れていた。

また、あの悲劇だけを生む戦争が起ころうとしている真只中である。

もちろんながらこの国はまだ平和の国のままだ。

そしてこの少女は、昔離れ離れになった大切な人を想っていた。

「やっぱり、あなたは今もプラントに・・・」

その続きを少女が言おうとした時に声が掛かる。

「おい、ユイ！」

ユイと呼ばれた先ほどの少女がそちに振り向いた。

東洋の血が混ざってあるだろう茶色に染められたロングヘアの髪にクリツとした赤い瞳、誰もが見惚れてしまいそうな綺麗な容姿だ。だいたい16歳くらいの年だろう。

「レグナ？・・・どうしたの？」

「教授がユイの力を借りたいって。で俺はその呼びかけ役だ」

レグナと呼ばれた少年は笑いながら、言った。

ユイはそれに対して、「またなの・・・？」と言おうばかりな顔へと変わっていく。

簡単に言つと、何回も救援に駆けつけていくヒーローみたいなモノか？

嫌そうな顔のユイをレグナは手をがちり掴む。

「では、徹夜の作業へと」

「はいはい」

先ほどの顔はまるで無かったかのような苦笑いをして、ユイはレグナと工場内へと向かい始めた。

「お、ユイ。来てくれたか！」

「教授が呼んだんでしょ？」

そこには、ユイ登場に顔を喜ばせた中年ぐらいの研究服をまとった男と数十人の研究員が一つのMSの作業・調整をしていた。

「まあ、そう気を悪くしないでくれ。でここなんだが・・・」

と教授は画面に指を刺した。

「“アウェイク”のパワー出力を抑えたいんだがどうも上手くバランスが取れていないんだ。

そこで君にも手伝って欲しいんだけど・・・」

教授の目線が灰色の機体へと向けられた。

それを追う様に、ユイとレグナもそっちに向ける。

「ORB - XXX00 “アウェイク”。新型エンジンを搭載し次世代MSの性能にも匹敵する力を備えているんだ」

教授はいきなり機体の解説をし始め、レグナはそれに「へえ」と言葉を漏らす。

当のユイは作業に打ちつきりだ。

「お喋りはそこまでにして、教授も手伝ってくださいよ」

「そつ、そつだね」

ユイは軽くそれだけ言うと、また自分の作業へと集中した。

作業は一晚掛かり、さすがにレグナも近くにあったソファで寝ていた。

他の研究員も全員帰宅している。

「あとは、ニュートラルゲージを少し修正したら完成かな？」

ユイは今一度機体に目を向ける。

“アクティブモード”の機体はまだ灰色に染まったままで個人の特徴さえ見出せない。

だけど・・・

「もうすぐであなたも星へ近づけるよ」

ユイはまだ覚醒を果たしていないロボットを見つめ、少し微笑えんだ。

覚醒の鼓動（２）

作業の終了と共にユイは徹夜明けのコーヒーを飲んでいた。

確か今日が“アウエイク”のテストだったはずだ。

まあ、そのテストパイロットなのがレグナなのだが・・・。

だらしない顔で寝ている彼を見つめた。

ふと気がついたのだが、レグナに掛かっていた布団が落ちている。

「そんなんじゃ、風邪引くぞ？」

ユイは彼に近づき、布団をかけ直した。

その直後だった。

——ズゴオオオオオン！——

「なっ、何！？」

向こう岸から大きい爆発音が聞こえ、ユイは工場の外へと出た。
しかし、市街には特に変わった異常はない。

次に付近の海辺の方へ目を向けてみた。

そこには合計２機のMSが交戦していた。その光景を手元にある双

眼鏡で覗いてみた。

「あれは確かオーブの……」

片方の機体はオーブの新型量産機“ムラサメ”である事がわかったが、

もう片方の機体は正体不明だ。

だけど、そのオーブ軍の新型量産機が何故こんなところで戦闘を？
考えている内にムラサメが撃墜され爆発音が響いた。

その爆発音でユイの思考が止まった。

「人が……死んだ……？」

姿は見えなくても、あれに乗っているのは人間だ。

爆発したのなら、中にいる人間は間違いなく死ぬ。

ユイは足を竦ませた。

別に自分の危機が迫る訳でもないのに、単純に「死」が怖く感じた。
正体不明のMSは機体の撃墜を確認し、周り見渡している。

ユイはその恐怖から逃げたくて工場へと戻ろうとした。

だが、最悪にもそのMSと目を合わせてしまい、ユイに気づき
こっちへ向かってきた。

マズイ……

死ぬかもしれない……。

そんな恐怖心がユイをより一層、行動を高めさせた。
なんとか工場内に戻ってきたユイに

気づいたのか、レグナは目を覚ましていた。

「どうしたんだ……。こんな朝早くから」

「話は後で話すから、此处から早く逃げ——」

「バアアアン——」

銃声が鳴ったと共に工場の壁辺りが一斉に吹き飛び、外が丸見えの
状態となった。

レグナには何が起こったのか、まったくわからなかった。

だが、流石に身の危険を感じたのか工場から離れる素振りを見せて
いる。

「レグナ、急いで!!」

ユイはレグナにそれだけを言い残して、アウェイクへと乗り込んだ。
幸いにもOSはさっきの作業の内にカスタマイズしておいたので、
すぐに起動する事ができた。

G E N E R A T I O N
U N S U B D U E D
N U C L E A R
D R I V E
A S S A U L T
M O D U L E

オーブの機体のくせにザフト製のOSとは今となっては皮肉とも思えた。

目の前に置かれたキーボードを打ち込みながら、スイッチを入れ、全身灰色だった機体がどんどん鮮やかに色を変えていった。

全体が白色に染められ、所々に金と赤色が付着する。

PS装甲（フェイズ・シフト装甲）を展開したのだ。

そして、工場のシャッターを無理やりこじ開け外にいるMSと向き合う形で対峙した。

覚醒の鼓動（2）（後書き）

登場人物

ユイ・キサラギ

（コーディネイター）

オーブの工業学区「パレーズ」に在学している少女。
容姿は男女問わず見とれてしまうほどの持ち主。

MSのプログラミング等に長けており、よく応援を頼まれている。
操縦の腕も高く、一回やってみるだけでほとんどわかってしまう天才肌のタイプ。

だが、ユイ自身はパイロットとしての活躍はあまり望んでいない。
過去にプラントに住んでいたが、前大戦後にオーブに移ってきた。
両親とは血が繋がっておらず、その事はユイも知っている。

レグナ・ストレイン

（コーディネイター）

オーブのパイロット養成学校を主席で卒業し

“アウェイク”のテストパイロットに選ばれた少年。

ユイとは“アウェイク”開発プロジェクトで知り合った。

戦闘に長けており、

そのMS操縦技術に関してはザフトの赤服とも対等に渡り合える高い能力を持っている。

ただ情が厚く、敵にも情けを掛けてしまいそうな性格。

登場機体

「ORB-X00」アウエイクガンダム

オーブで内密に開発されていた新型のMS

前大戦で脅威の活躍をしたフリーダム・ジャスティスのデータを元にオーブの工業学区「パレーズ」で造られた。

バッテリー型エンジンに変わり、新型のエンジンを搭載。

その結果、通常エンジンとは比べ物にならない火力と機動力の両方の特化を図る事に成功した。

次世代MSに使われた“ビームシールド”の元となるシールドを装備。

なお、アウエイクにはアウエイカーと呼ばれる2種類の武装パックがある。

標準武装に

MA-XL20BS 高エネルギービームライフル

頭部にM8M3H13ミリ自動近接防御火器

腰部にMGX-2300 メガデウス複相ビーム砲が二門

腹部にSVG-KD01X ハイパープラズマレーザー砲

MA26-BD310WE リベルト・ビームサーベル

両腕にMX2000 デイルス・ビームシールド

ウイングアウエイカー

フリーダムの大型の翼を改良し、8枚の翼を用いた機動力上昇パック。

これを装備中のアウエイクの機動力はムラサメのMA形態の速度の1.6倍のスピードを得る。

キャノンアウエイカー

バックパックに陽電子砲を備えた火力上昇パック
主に要塞攻略等に使われる。

覚醒の鼓動（3）

OSはちゃんとカスタマイズしたのに未だに扱いにくい。
だが、文句は言ってられない。

ユイはプログラム用のキーボードを使い、補正システムにカスタマイズを加えた。

ペダルを軽く踏み、アウエイクを前進させる。

敵MSはアウエイクの登場に気をとられたのか、
攻撃が一瞬止んだ。

——今だ！

その瞬間を見逃さなかった。

レバーをおもいつきり前へ倒して、敵MSへとタックルを仕掛ける。
肩からのタックルをともに食らった敵MSは後方へと倒れこむ。

「やった!？」

声を挙げて、喜んでいる事もつかの間。

倒れた敵MSは右手に装備していたライフルを工場の前にいるアウエイクへと向けようとしていた。

その動作を見て、避けようとしたが重大な事に気づく。

（今避けたら、工場に当たってしまう。そうすればレグナが……）

工場内をモニターに映す。

レグナはまだ逃げ終えていなかった。

他に手立てはないかと、機体の構造をアップした画面へ目を向ける。
そして、ユイはある一つの項目へと集中した。

「デイルス・ビームシールド」……これなら!」

両腕にビームシールドが搭載されている事がわかった。

急ぎキーボードを叩き、それを展開させる。

直後、コックピット内に警報になる。

嫌な事に

「ロックオンされた!？」

悲観に叫びつつも手を動かすスピードは落さなかった。

もう駄目だ。

ユイはそう思った。

そして…、敵機のビームライフルが発砲された。

しかし、なんとか直前にシールドが展開された事を確認し、危機一髪にそれを免れる事に成功した。

ため息をこぼして、少し涙目を浮かばせる。

ユイは手に汗を握りながら、その揺らいだ目で敵機を見つめた。

「こんな場所で……」

ユイはレバーを引き、ペダルを思いっきり踏んだ

アウエイクは高く上昇する。

そして、砲撃を続ける敵機にビームシールドを向けながら、そのまま落下していく。

「戦うなああっ!」

これを避ける事はできず、コックピットに重たい一撃が当たった。
敵機の胸部から電気が走り、そしてモノアイが停止する。
倒したのか？

不安だったが、敵機が動かなくなるのを確認した。

それにほっとし、ユイの緊張はだんだんと解けていく。

… たった数分の出来事がまるで長い時間のように彼女は感じていた。

レグナは以前逃げ終えていない。

それどころか、二機のMSの戦闘をずっと見ていた。

「ユイ、お前……」

レグナは自分がいる工場を必死で守ろうとしている機体を見つめる。
確か、ユイは一回しかMSを操縦した事がないはずだ。

それもあの機体よりも十分な程に扱いやすくなった機体を…。

それなのに、今のさっきのアウェイクの動きは並のパイロットでは
絶対にできない。

レグナだからこそ、これがわかった。

過信しているわけではないが、レグナはパイロット養成学校を主席
で卒業し、その実力もザフトの“赤”と並ぶ程の操縦の腕だ。

だが、そのレグナでさえも最初にアウェイクの操縦をした時はほと
んどともに動かせることができなかった。

だから、さっきのアウェイクの動きには驚きを隠せなかったのだ。
何度も何度も瞬きを繰り返す。

そして、何かを考え決心したのか。

レグナは真っ直ぐな目色をして、再びアウェイクを見つめた。

ユイが敵機のコックピットのハッチを開けに、機体から降りようとした時だった。

いきなり敵機が爆発し、跡形も残っていなかった。

―どうして？

さっきの衝撃で破壊してしまったのか？

そう考えては見たが、明らかに爆破する時間差が開き過ぎて、それはありえないと思い込む。

なら、残った答えは自然と出てきた。

「情報秘密を漏らさない為？」

確かに調べたら、どこの所属の軍が即座にわかるだろう。

でも、だからって……。

ユイはやりきれない思いでアウェイクのハッチを開けて、ワイヤーを使って降りていく。

そして、呆然と立っていた友達の方へと駆け寄っていった。

「レグナ、大丈夫！？」

「あ、ああ……。俺はなんともない」

「……よかった」

胸から湧き出てくる安堵を感じ取って、悲惨な工場を見渡す。

「これじゃあ、教授に怒られるね……」

「まあ、俺たちもアウェイクも無事だったしさ、大丈夫だろ」

心配そうな顔をしていたユイをレグナは安心させる。

その光景を見守るかのように朝陽が昇って、周りの景色が明るく映されていく。

光に包まれたアウェイクはどこか神々しく見えた。

覚醒の鼓動（４）

<――以上、緊急のニュースでした。続きましては……>

自室でコンピューターを触りながら、ユイはテレビの方へと目を向けた。

あの出来事はもうニュースにされており、その場にいた二人は記者達に取材をとらされていた。

まあ、悪く言えばあの場に引き止められていたと言う事になる。

教授にも連絡を入れて、すぐに工場に来てもらった。

悲惨な顔をして嘆いていたが、レグナが耳元で何かを言った後に急にまた喜んだ顔をしていた。

多分、アウエイクに関係している事だろう。

一応、報道されている情報であの機体はザフト軍のものだった事がわかった。

オーブ政府はそれに対して、連合との同盟を強めていく事を今後の姿勢としている。

「でも、なんでザフトの機体があんな所で……一機で戦闘をしているんだろ？」

この事がユイの頭の中でどうにも引っかかっていた。

別に自分とはそこまで関係ないのに、どうしてそこまで気にしてしまふのだろうか…？

そう考えている内に彼女を睡魔が襲った。

ベッドに倒れ、ゆっくりとまくらに頭を落としていく。

そして、だんだんと意識が遠くなっていき、自分が夢の世界に入っていく事を感じた。

夢の中ではユイは昔の事を思い返していた。
彼……、クロードと別れた時の日の事を。

「——どうしても、オーブに行くの？」

いつも元気で明るかった彼も、この時だけは寂しそうな顔で言った。
彼とユイは生まれて14年間、ずっと一緒に仲の良い幼馴染だった。
ユイは頭を縦に振る。

「そっか……」

ユイはクロードの顔を見ていらなかった。
見てしまうと、自分がきつと泣いてしまう。
そう思ったからだ。

「でもさ、また絶対に会えるよ！だって、オーブとザフトは有効関係が今も保たれているし……。だから——」

その言葉はとても優しく感じて、だからこそ余計に涙が溢れてきた。

「——泣かないで」

「ッ！？」

そう言われると余計に泣きたくなるのは人の本能なのだろう。

涙で濡れた顔を必死でふき取る。

そして、やっと顔を上げて見てみると、彼の顔も今にも泣きそうでそれを抑えているのがわかった。

「…………絶対に会おうね」

それが別れの時に彼に言った最後の言葉だった。

——また会えるよ！

この彼の言葉に希望を託して、少女と少年は別れた。

時計のタイマーが部屋中に鳴り響く。

「ん…………、もう朝なの…………？」

目蓋を擦りながら、小さい欠伸をする。

懐かしい夢を見た。

「…………もう、あれから二年も経つんだね」

ユイは服に着替えながら、机の上に立てられていた懐かしの写真を

見つめた。

写真には元気そうに笑った顔で写っているクロードとその隣に大人しそうな顔で写っている自分がいた。

（今、彼は何をしているのだろうか？）

昨日の事件の事なんか、もうすっかり忘れて、朝っぱらからずっとそればかり考えていた。

その頃、アウエイクを新しい整備場所へと運ばせたレグナは、これから自分の指揮官となるマサキ一尉、アウエイクの開発責任者のソルナー教授達と話をしていた。

「自分はあの戦闘を見て、そう感じました」

レグナは自信の籠もった声で言う。

「だが、その少女は軍人でもなければ、パイロットでもないのだから？」

「だけど、あの戦闘で彼女……ユイ・キサラギさんは自分よりアウエイクに適合していると思いました」

「だがしかし……！」

マサキ一尉とレグナが講義している中、ソルナー教授は静かに口を開いた。

「まあまあ、お二人とも落ち着いて……」

それでも議論を激しく行う二人に教授がある一つの提案を持ちかけた。

「なら、これはどうだろう？ ユイ君をテストパイロットに選び、その能力を確かめてみるという事で……」

「だけど、彼女は軍人ではないのです！ 民間人を危険に晒す訳には――」

「私には民間人でも優秀ならば、使すべきだと思うのだが？」

「しかし！」

「もし、連合に裏切られた事があつたなら確実にアウェイクの力が必要となる。その時にその機体能力を最大に引き出せるパイロットがいなきゃ、宝の持ち腐れだろ？」

「……」

マサキ一尉は黙り込んだ。

まあ、連合に裏切られるという事は不吉だとは思うが、もしもの時の事を考えると確かにそうだったからだ。

「決まりだな」

教授は逆方向へ振り向いた。

そして、最後に一言をこう言った。

「あ、そうそう！ユイ君を正式にテストパイロットとするためにそ
うちの方で軍に偽造で入隊させてくれ、頼むよ」

マサキ一尉はその提案に反論できず、ただ地面を見る事しかできな
かった。

そして、去っていく教授をただひたすら睨んだ。

覚醒の鼓動（４）（後書き）

登場人物

クロード・アスター

（コーディネイター）

ユイの幼馴染で２年前にユイと別れた少年。
あれ以来、ユイはまだ一度も彼とは会っていない。

マサキ一尉

（ナチュラル）

オーブのMS特殊部隊“ディート”の指揮官。
同時に“ムラクモ”の艦長でもある。

登場機体

オーブ・イズモ級「ムラクモ」

特殊部隊“ディート”の母艦。

アウエイクはこの艦に配備される事となる。

覚醒の鼓動(5)

朝食を取り終えたユイはレグナに、「ムラクモに着てくれ」といきなり呼び出されて、仕方なくMSのドッグへと来ていた。

ドッグ内には白と赤が混ぜ合わせた色の戦艦がマストライバーへと配置されていた。

オーブのイズモ級のクサナギと同型艦の“ムラクモ”だ。

そして、そのムラクモヘトレーターに乗せられたアウェイクの搬送を開始している。

ユイはレグナの言葉に従ってムラクモに乗り込み、艦内でその彼を探し歩いた。

途中、整備班の人達とすれ違い、その時にその人達が話していた事を小耳に挟んだ。

「どうやら、アウェイクのパイロット…変更されるらしいぞ?」

「本当か?それ」

「ああ、レグナ・ストレインが辞退したんだとさ」

「なら、代わりに誰が乗るんだろ?」

「なんか噂でなんだが、そのレグナが推薦した奴らしいぞ」

「へえ」。…まあ、あのレグナが推薦するんだから、凄い奴なんだ

ろくな」

パイロットの変更……？

レグナが辞退した……？

ユイは困惑する。

（今の話が本当なら、一体誰がアウェイクのパイロットなんだろう？）

この事も、とにかくレグナに聞くべきだろう。

ユイはまだ向かっていないブリッジへ探しに行った。

ブリッジにはレグナと士官服を来た人がいた。

「マサキ艦長、彼女が着ました」

レグナはユイに軽く手を添えた。

それに気づき、頭を軽く下げる。

「君がユイ・キサラギさんですか？」

突然、士官服の男の人に名前を呼ばれ、ユイは慌ててその人に返事をする。

「あつ、はい！……えーと」

「私はこの艦を勤めさせていただく、マサキ一尉です。」

どうやら、この人がこの艦の艦長だ。

「あの……、艦長さんはどうして私の名前を？それにどうして私をここに呼んだんですか？」

ユイはマサキ一尉にそう尋ねた。

それを聞いて、返事を返したのはレグナだ。

「それについては俺から話します。では、ユイ・キサラギさん、こちらへどうぞ」

レグナの言葉が妙に畏まっているの少し笑ってしまう。

普段とはまったく正反対の彼に案内され、ユイはその場を後にした。

彼との行き先はMSデッキだった。

見てみるとアウェイクとムラサメが数機、配備されている。

ようやく、レグナが緊迫した顔からいつもの顔に戻り、ユイは話しかける。

「で…、私をここに呼んだ理由って何なの？それに……」

もう一つ、聞くべき事がある。

「アウェイクのパイロットを辞退したってホント？」

「ああ…、パイロットを辞退したのは本当だよ。そして、だから君をここに呼んだんだ」

「それとこれにどう関係が——」

「——君がアウェイクのパイロットだ」

覚醒の鼓動（6）

彼の口から、いきなりとんでもない事を聞かされた。

「はあ？……私が…アウェイクの…？」

「ああ、もう正式に手配されているしな。今日から、この艦の専属パイロットになる」

「ちょ…、ちょっとまって！」

ユイはレグナのいきなりすぎる言葉に早くも混乱していた。

「…いきなりそんな事を言われても、意味わかんないよ！」

頭に何かが重く押し掛かった気分だった。

「それに…、私は絶対にMSになんか乗らない！」

「でも、昨日アウェイクに乗ってただろ？」

レグナが痛い所をつく。

「あの時は……、状況が状況だったから仕方なく…」

ユイは口ごもった。

確かにあの時、自分は無意識にMSに乗ってしまったのだ。でも、だからってこんな勝手に決められるのは迷惑だ。

「私がパイロットになるのは……やっぱり無理だよ……！」

泣きたくなりそうな声で呟く。

人殺しなんかしたくない、そんな光景も見たくない。

昨日の事がユイの頭に入った。

床に崩れそうになったユイを支えて、レグナは穏やかにこう言う。

「何か激しく勘違いしてると思うんだけどさ……、”テストパイロット”だぞ？」

「……え？」

ユイはもう一度聞き返す。

「だから、アウェイクのテストパイロットだって。だから、機体のパラメーターとか武器のテストとかしたいからさ……、それに一番適合していると思ったユイを選んだんだ」

「そんな事だったら、レグナでもできるんじゃないの？」

彼の手を振り払い、自分でしっかりと立ち上がる。

テストパイロット。

……それだけなら、さっきの泣きかけた思いを返して欲しい。

ユイは心のもやもやした気持ちを吹き飛ばし、泣きそうだった顔を普通に戻す。

「俺が初めてアウェイクを動かした時、ノロノロとした動きしかできなかつたんだぞ？」

確かに正常に組み込まれていなかったOSでは大した動きもできな

い。

それはレグナもわかっているはずだ。

「でも、お前はそれを“修正しながら”、初めて乗る機体で戦って勝利した」

「あ……」

言われて見るとそうだった。

あの時は何も考えず、ただ「生きたい」と思いながら何もかも必死だったから。

「……」

黙り込んだユイにレグナは話し続ける。

「だから、君を推薦して教授に取り入れてもらった」

向かい先のアウェイクを見る。

そして、決心した目でゆっくりと口を開く。

「……わかった。テストパイロットだけなら、引き受けてもいい…かも」

「ホントか？」

「テストパイロットただだよ？」

「ああ！…とりあえず、もうムラクモも発進するし、艦橋に戻ろうか！」

「え……もう発進するの！？」

ユイがその言葉を言ったと同時に、艦が激しく揺れた。多分、この艦は発進されただろう。

「ちょっと……もう、なんでこう何もかもいきなりなのかな……」

うんざりした気分でレグナの後を追う。

もう、トラブルメーカーな彼について行く事だけが今の彼女に残された唯一の選択肢だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7423b/>

機動戦士ガンダムSEED DESTINY 『Universe of Aweke』

2010年11月16日10時41分発行